

池田謙齋（一）

—初代東京大学医学部総理—

堀江健也

池田謙齋は東京大学初代医学部総理として明治初期の本邦近代医学の進歩に努めた人物である。しかし、彼について知られること比較的少なく、僅かに血縁のつながりにより入沢達吉によって、後に緒方富雄氏により彼の伝が紹介されているに過ぎない。先般、はからずも謙齋の御子孫の方々と御交際願えることとなり、しかも謙齋の實子高崎斐子あや様が小生宅に甚だ近くお住まいになり、お互いに往来することが出来、謙齋の書簡、謙齋宛の書簡を拝見する機会を得、斐子おばあちゃんは明治二十六年生まれの高齢にかかわらずいたって健康で記憶力は抜群で様々のお話を聞くことが出来たので、入沢、緒方両先生の補遺を行うことが出来れば幸いである。

西洋においてギリシャ医学、アレキサンドリア医学に次いで近世医学に発展する萌芽としては南イタリアのサレルノは南は海に面し、北と東を山に囲まれ保養地として古くより知られ、すでに九世紀に一定の権限を与えられた医師組合が存在し、弟子の育成を行っていた。この地の初期医学教育は明らかにされていない点も多々あるが、ギリシャ語文献のラテン語訳が用いられていたことは間違いないようである。

アルキポエータ（一一六五）は次のようにサレルノ医学をたたえている。

「サレルノの誉れは永遠に消えることなし

人々、治癒を願いて世界より訪れる

サレルノの医学こそ称えらるべし」

西洋では医学教育はこのように古くから行われ、イタリアのみならず各国から貿易港でもあったサレルノに医学を学ぶために集まったことが知られている。更にルネッサンス時代に入ると北部イタリアの大学において医学教育は大いに開花する。

翻って本邦の医学教育の跡をたどれば、曲直瀬道三（一五〇七—九五）が、明に留学した田代三喜（一四六五—一五三七）に学んだ李朱医学を身につけ、京都に啓迪院という医学舎を作り、二代道三支那に至り大学林が完成され、豊織時代より徳川初期にわたり、多数の優れた門人を輩出し、門下八百とも三千とも称された。これが本邦医学学校の始まりであろう。下って徳川末期において大坂の適塾は緒方洪庵により開かれたが、医学を専門としたわけではなく、より広く人材を教育している。

その緒方洪庵は江戸の医学校の前身ともいえるべき種痘所の長として迎えられる。しかし、慣れない江戸の生活と多忙が災いして短い生涯を、多彩な活動と共に終えることとなる。

本邦の医学教育はこの種痘所が医学所、医学校を経て大学医学部となる。この大学医学部の初代医学部総理が池田謙斎である。しかし、この謙斎は後に宮中に入るので、前述のように知られることがかなり限られたようである。

彼は明治の初期ドイツに留学し、帰朝後東京大学医学部総理となる。その留学時の書簡、あるいは交友関係の今まで知られざる面について述べたい。

それに先立って、東京大学医学部の名称がしばしば変更しているので名称を整理記載する。

安政三年（一八五六）二月一日、幕府はそれまで洋学所と呼ばれていた学校を蕃所調所と改称し、七月一日より旗本の子弟の就学を許可している。この源流は貞享元年（一六八四）十二月に渋川春海をして幕府天文方としたことに始まり、

後、明治二年（一八六九）六月開成学校は大学南校となる。

医学教育については安政五年（一八五八）正月、幕府の許可があり、私設の種痘所が開かれることになり、江戸の蘭方医八十二人の醸金により、五月七日、神田お玉が池の元誓願寺前にある当時の勘定奉行（安政五年五月まで）川路聖謨の拝領地を借り、「お玉が池種痘所」が設立され、津和野藩の留守居役、後に幕医となった池田多仲がその責任者となった。この池田多仲（支仲）が後に池田謙齋の養父となる。しかし、この種痘所は十二月に類焼し、万延元年（一八六〇）に下谷藤堂侯上屋敷隣に新築移転した。この復興には俠気の人銚子の醬油業者である浜口梧陵らが多く援助をしている。幕府はこれを収めて直轄とし、仙台藩医の大槻俊齋を種痘所の頭取に任じた。

文久元年（一八六一）十月に、種痘所は西洋医学所と改称された。内容的にも教授、解剖、種痘の三科がおかれた。文久二年四月、大槻俊齋病死、緒方洪庵が八月に大坂より江戸によれば第二代頭取となり、松本良順が頭取助となった。

文久三年（一八六三）二月に、西洋医学所は単に医学所とよばれる。これは幕府が西洋医学に重点をおくことを意味している。同年六月頭取の緒方洪庵が没して、七月に松本良順がその後任となった。彼は長崎でポンペのもとでその代理をしていた程ヨロップ、医学を身につけていた。松本良順は学制改革をし、学生は七十名を数えるに至っている。

明治維新の際、日本の諸制度は大きな変革を受けた。しかし、医学所は頭取の松本良順が幕軍に投じ会津に至ったが、制度は維新後もそのまま新政府に引きつがれ、明治元年十月東京府大病院に吸収され、十月二十四日は緒方惟準（よしのぶ）が之を主宰した。明治二年（一八六九）二月頃、相良知安と岩佐純が医学取調御用掛りとなり、これまでの大病院は医学校兼病院と改称された。そして同年十二月には大学東校と改称された。開成学校はこれに対して南校とよばれた。その頃の大学は今の文部省の仕事を兼ねていた。

明治三年（一八七〇）七月には大学が廃止され、大学南校、大学東校はそれぞれただの南校、東校と改称される。この東校の系統が医師養成の目的志向をもって発展してゆく。

相良知安等の尽力により医学の範はドイツにとるべきであるという方針が決定され、ドイツより医師を医学教師として招くことになると共に、明治三年には池田謙齋、長井長義、大沢謙二等、合わせて十名あまりがドイツ留学を命ぜられてゐる。

明治五年（一八七二）にはこの学校は第一大学区医学校と改称され、二年後の明治七年には東京医学校と改称される。

明治十年（一八七七）に東京開成学校と合併して始めて東京大学という総合大学となり、その時の医学部総理（学部長）が池田謙齋で初代と考えてよからう。後、明治十九年（一八八六）帝国大学を称し、第二次大戦後の昭和二十二年（一九四七）再び東京大学を称するようになるが、その間には多くの学校を併合して巨大な総合大学となった。この学校の名称がさまざまに変わっているが幕末以来世界の大勢に遅れていた日本の学問を世界的水準に高めようと国家が大いに力を入れた学校である。

池田謙齋は明治三年にドイツに留学したので当時は明治政府が未だその基礎が固まっておらず、彼をドイツに派遣するに大きな発言権を有した相良知安は部下の事件にまき込まれ、その職を追われ罪をとわれる状態であった。

本邦に初めて大学医学部が出来たのは前記のように明治十年で、七年間の正規の医学教育をドイツで終了した池田謙齋はその初代総理となり、現在の医学教育の基本ともなるべきものがこの時出来たと考えてよからう。

謙齋について現在まで詳しく記しているのは大正六年に入沢達吉が発行した「回顧録」である。これは彼の死の前年、医海時報社員が謙齋の口述したものを筆記し、入沢が発行したもので、その始めに次の文が記してある。

「回顧録一篇、是家叔池田謙齋先生が、去る明治三十四年中、医海時報社の需に応じ、親しく其社員に口授せられたるものに係る。今茲、先生將に喜字の寿宴を催はされんとするの企あり、乃予は親戚故舊の間に頒たんと欲して、特に之を割願に附す。

大正六年十月

入沢達吉謹識

とあり、その裏面に

喜寿の祝の日によめる

夢の間になくそちなくつ過こし来て

見し世をかたる今日のたのしさ

謙齋

とあって、回顧録は始まっている。五十頁にわたって、口述の形式で記してあるので要約し、また、第三者的に追記しつつ記してみよう。

謙齋の本姓は入沢で、父は入沢健蔵といった。家は越後蒲原郡の西野という所で、代々此里の里正であった。彼は天保十二辛丑の歳（一八四一）十一月にこの地で生まれ、幼名を圭助、後に謙輔と改名した。

時代は明治維新の二十七年程前、幕藩体制は倒壊寸前に在り、家斉没後老中水野忠邦は天保の改革を行って綱紀の弛み、財政の紊乱を建てなおさんとしたが、改革が急でしかも峻厳なため、怨言誹謗百出して遂に水野の経綸空しく数年にして失脚してしまふ時代であった。

彼は生家で家庭教育と寺小屋教育を受け、十六歳まで故郷で過ごしたが、向学心に燃えて安政五年（一八五八）春三月男子志を立て郷関を出づという勢で江戸へ上った。恰度その頃彼の兄の入沢恭平（達吉の父）が前から江戸に上っていて、土生玄昌という幕府の奥医師の塾に入っていたので心強かったわけである。恭平は彼より十歳年長で三度目の上京であった。

時代は尊王攘夷論がさかんな時で血気の少年謙輔は文武両道が必要であると考えていた。

この年は四月に井伊直弼が大老となり、翌年安政の大獄がおこる等、時代の流れは大きさを増していた。また、後に彼と深い縁をもつことになる種痘所がこの年の五月七日神田お玉が池に西洋医等により開かれている。

謙齋は劍客伊庭軍兵衛のもとに入門した。隣は幕府の医学所で彼は文武兩道に励んだ。

江戸へ出て暫くしてから竹垣竜太郎という旗本が当時「グラマチカ」位の蘭語が読め、謙齋にも洋学をやってはどうかと頻りに勧めてくれた。彼は当時攘夷仲間であったが、敵を知らねば戦は出来ない。攘夷というからには敵国語を知る要があると考えたのと、謙齋の父は四人兄弟いづれも江戸へ遊学し、大槻玄澤の塾に入っていて、越後の片田舎ながら西洋の地図などがあり、アメリカ、ヨーロッパ等地図の上では知っていたので竹垣について洋学の手ほどきを受けることにした。

恰度その頃緒方洪庵が医学所の頭取になり上京して、竹垣の隣家に住むことになった。そこで竹垣竜太郎の世話で緒方の内弟子となり蘭学を勉強出来るように頼んでもらった。ところが緒方のいうには自分は大坂では書生を家内においたが江戸では皆医学所へ入れることにしているので、そうしたらどうかというので医学所に入り緒方の門人となった。

「緒方洪庵伝」の門人帳によれば、文久三亥年（一八六〇）二月二十日入門、北越今町、北條謙輔が第六一八番目の門人となっている。

洪庵はこの年の六月十日に没しているので、彼の生前の最後の門人ということとなる。しかし門人帳には彼の後六一九一六三七番まで記載がある。

なお北條謙輔の北條という姓について謙齋の二女^{あや}妻子さんに問うたところ、入沢は元来北條高時の身内で戦に敗れ、信濃の南佐久に落ち、その土地が入沢というので入沢を名のこととなり、更に村上義清に仕え、又敗戦をして遂に越後に落着いたということである。それで若い時の謙輔は北條を名のあることがあったので、門人帳には北條と記されている。

(一〇〇)

(練馬総合病院)

Kensai IKEDA

by

Kenya HORIE

Professor Kensai Ikeda was the first president of the medical school of Tokyo University, but he is little known, except through his own “Reminiscence”.

He was born in 1841 at Nischino, Niigata prefecture. His father's name was Kenzo Irisawa, and he was called Keisuke, or Kensuke Irisawa when he was young.

He went to Tokyo when he was 16th years old looking for his elder brother named Kyohei Irisawa.

At Tokyo he went to the school of medicine opened by Tokugawa-Bakufu named “Igakusho”, and he learned “Kendo” at a school opened by “Gunbei Iba”.

He learned the Dutch language from Ryutarō Takegaki, one of the servants of Tokugawa.

Kōan Ogata came to Edo (Tokyo) from Osaka during Bunkyu 3, Feb. 1860. Kensai hoped to learn from Kōan Ogata, and he was admitted to Ogata's medical school. His student number at the Ogata school was No. 618. He was the last student of the Ogata school during Ogata's life.